
Pandora

明日香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P a n d o r a

【Nコード】

N 6 1 5 8 X

【作者名】

明日香

【あらすじ】

女子高生の主人公には悪い噂があった。それは小学生の頃、男の手を握り潰して殺したと言うのだ。本人の記憶の中ではそれは別の男がした事だったが、真相は解明されないまま、噂だけが広がって行った。そんなある日、銃弾も効かない者たちが現れ、世間を騒がせ始める。その正体は生きた人間の遺伝子を組み替える技術で造られた者たちだった。

焼け落ちた研究所

私は普通ではない。私は普通ではない。

それが、私のコンプレックスだった。

高2のそろそろ春の終わりが感じられる季節。私は運動場の片隅にある木陰の涼しげなベンチに腰掛け、体育の授業を見ていた。今日の授業はマラソンである。

目の前ではクラスメート達が息を切らしながら走っている。

私はそんなクラスメート達をぼんやりと眺めていた。

「ねえ。早川さん。こうしていると暇だよな」

元気そうなのに、どうして、見学しているんだろうと思っていた男子。白石が私の少し離れた位置にやって来て、話しかけて来た。

「私はいつもこうだから、別に何ともないんです」

そう。私は小学校の中学年の頃から、一度も体育の授業に出た事が無い。

それは、身体が弱いため、体育は見学させて欲しいと言う申し出を保護者からしてもらっているからである。その保護者と言うのは、私には両親がいないため、母方の祖父である。

「そうなんだ。僕は暇で。ねっ、早川さんって、休みの日は何をしているの？」

私は白石の言葉に頭が混乱した。話につながりがない！

突然、何を聞くのか？全く彼の意図が分からなかった。

「どうして？」

私は率直に聞いてみた。

「実は1年の時から、気になってたんだけど、2年になって同じクラスになったんで、喜んでいたんだ。でも、なかなか、早川さんと話しする機会がないじゃない。今日はゆっくり話したくて、体育

見学にしたんだ」

私は目が点になった。

それはどう言う意味なのか？

私に好意を持っていると言う事か？

それとも、からかいたいのか？

私は白石の質問の意図が分からないので、それに答えず、話を打ち切る事にした。

「私は一人が好きだから」

そう言っ、白石の方から視線を外した。

「そうなの？ここで話しかけると、お邪魔？」

私は目線を合わさないまま、こくりとうなずいた。

「うっ！ショック」

そう言っ、白石は少し静かになった。

これで、訳の分からない話に付き合わずに済む。私は再び自分だけの世界を確保できた。

私は本当に一人でも、苦にならないのである。

いや、その方が好きなくらいだ。

再び訪れた一人の時間に、私は視線を上に向け、遠くの山を見た。このベンチに座って見える山の中腹には、私の叔父が所長を務めていた研究所の焼けおちた建物が建っている。そして、そこは私には思い出深い場所だった。

10年ほど前の事だ。その日も小さな私はそこにいた。

3階建ての鉄筋コンクリート造りの研究所の中は慌ただしい状況だった。大勢の所員が書類を抱え、走りまわっている。そして、そんな人達の横で、何人かの所員はパソコンやワークステーションのハードディスクのデータを特別なソフトを走らせ、完全消去していた。

ここでは、いくつかのテーマ別にチームが形成される形で、研究

が進められていた。そして、各チームにはリーダーが置かれていた。そんなリーダーの一人、山本は状況報告のため、所長室をノックした。

「入れ」

「失礼します」

山本がそう言って、ドアを開けた時、中から子供を抱えた男性が入れ違いに出て来た。

山本はその男性に見覚えは無かったが、少女の事は知っていた。両親を失ってから、この研究施設にしょっちゅう遊びに来ていた所長の姪っ子 早川結希である。

「所長、こんな時に何かあったのですか？」

「あ？結希の事か？」

「はい。手に包帯を巻かれていましたが」

「ちよつとな。まあ、大丈夫だ。」

ところで、状況はどうだ？」

「はい。データの消去はもう直終わります。書類や研究に使った試料などもすべて集会室に集め終わりました」

「分かった。では、灯油をまいて、焼却処分の準備を終えたら、全員を大会議室に集めてくれ」

「分かりました。しかし、所長、データや試料などを処分しても、我々所員がいる限り、この研究の成果は大統領の手に入ってしまうのでは？」

「ははは。さすが山本君。だが、心配要らん。その事は後で、話をするので、早くみんなを集めてくれ」

「はい。では直ちに」

山本は所長室を出ると、所員たちに集まるよう指示して回った。

この研究所の中には、研究や実験のための部屋ばかりではなく、来客用の応接室や会議のための会議室もある。そんな中でも、一番広いのが大会議室だ。

所員たちはそんな大会議室に集められた。大会議室のテーブルの上には飲み物が用意されていた。そんな和やかそうな演出とは裏腹に、それを囲んだ全所員58名の表情には切迫感が浮かんでいた。そんな中、所長の小田が遅れて姿を現した。

「皆さん。急な対応をしていただき、感謝しております」
中央に立った小田はそう言いながら、頭を深々と下げた。

「研究者として、重要な研究成果を破棄しなければならない事は不本意だと思っています。それなのに協力いただき、感謝の言葉もない」

その言葉通り、何人かの所員は悔しさで涙を浮かべていた。

「我々の研究は人類に明るい未来をもたらすはずだった。大統領はその技術を軍事に利用しようと考えている。頭の中に私利私欲しかない、あのような者がこの技術を手に入れたら、この国は終わりである」

所員たちの多くは所長の言葉にうなずいていた。

「明日、ここに政府の者たちが来る前に、全てを処分する」
所長は大きな声でそう言った。

その言葉が終わると、秘書が所長にグラスを手渡した。

「残念ですが、この職場でお会いするのは今日が最後です。
最後に乾杯をして、別れにしたいと思います。」

皆さん。お近くのお好きな飲み物を」

その言葉に、皆それぞれに飲み物を手にする。

山本もグラスを手に持った。その時、山本ははたとある考えに思い当たった。

「乾杯！」

所長がそう言いながら、グラスを差し出す。

「乾杯！」

全員がそう言いながら、グラスを差し出し、グラスを飲みほした。

やがて、漆黒の闇に包まれた山の中ほどから、真っ赤な炎が噴き上がった。

その炎が消えた時、そこはただの廃墟でしかなく、58名の遺体が収容された。

私がやったんじゃない！

「よっ。早川。今日も見学か」

体育の授業が終わり、教室に戻ろうとしていた私に一人の男子が声をかけて来た。明らかに、からかい口調だ。

「仕方ないでしょ。結希ちゃんは身体が弱いんだから」

一緒に歩いていた由依が怒りを含んだ口調で、その男子に言った。
「おお、怖っ！」

由依の口調にそう言っておどけて見せた。

そのやり取りを聞いていた別の男子 遠藤が口をはさんできた。

「お前、早川をからかうなんて、恐れ知らずだな」

私の頭の中に、次に浴びせられるであろう言葉が浮かんた。

「お前、早川に腕をちぎられるぞ！」

遠藤はやはり私が聞きたくない言葉を続けた。

時々、私に浴びせられるその言葉はいつも私の胸に突き刺さった。

「違う！あれは私がやったんじゃない！」

そう叫びそうになったが、声にならず、涙がぽとりと廊下の床に落ちた。

私はその場にいたたまれず、走りだした。

「何をばかな事言ってるの、しつこいよ」

背後で由依はその男子たちを睨みつけ、そう言った後、私を追いかけてくる。

「結希。待って」

私は前にいた同級生達を追い抜き、トイレに駆け込んだ。
そして、トイレの洗面台に両手を置き、鏡の前で泣いた。

「違う。違う。あれは私がやったんじゃない」

首を激しく振りながら、嗚咽している私の肩を誰かが抱きしめた。

「結希、あんな馬鹿男子の言う事なんか、気にしちゃだめ」

由依の声だ。

「みんな分かっているんだから。大丈夫。ねっ」

私の肩を抱きしめている由依の手に力が入った。私はそれで、少し落ち着きを取り戻した。

「うん。ありがとう」

私はまだ涙声だったが、涙は止まっていた。由依は私が完全に泣きやむまで、私の肩を抱きしめていた。

「行こう！」

由依の言葉に、私は静かにうなずき、トイレを由依と一緒に出た。

教室では学級委員長の河原真がさっきの男子達を怒鳴っていた。

「女子を泣かせる奴は最低だ」

真は幼い頃、両親を失い、理由はよく知らないのだが、私の祖父の家に住んでいる。

彼は学校一の、いや日本一と言っているくらいの人材である。この学校にいるような成績ではないのだが、何故か私と同じ学校に進んできていた。

「うっせーな。勝手に泣いたんだろうが」

「お前が人が傷つくような事を言ったからだろう。」

女子を泣かせて、男として恥ずかしくないのか！」

「そうよ。結希に謝りなさいよ」

由依が、教室の中まで入り、真の言葉に同調した。

「俺は同じ男として、恥ずかしいぜ」

さっきまで、一緒に体育を見学していた白石だった。その声をきかけに女子も、その男子達を非難しだした。私は教室に入らず、廊下で立っていた。

「分かったよ。悪かったよ。俺が悪かった」

「全然、悪そうじゃないじゃない」

「悪かった。早川が来たら、謝るよ」

その時、由依が教室から出てきて、私の腕を引っ張った。私は半ば引きずられる感じで、教室の中に入った。

「ほら、早く謝りなさいよ」

由依の言葉は強い口調だった。

「悪かった。ごめん！」

「いいよ。もう」

私はそう言った。

私はこれまでに、何度も同じような繰り返しをしてきたのだ。こんな事したって、何にも解決しないことくらい、分かっている。

どうせまたいつか、この男子達か、他の誰かが言うに決まっている。それが、一年後なのか、明日なのか、分からないが、決して無くなったりはしないのだ。

あの日の出来事

あの日、8歳だった私はランドセルをしょって、下校途中だった。小学校がちょうど街の大通りを挟んで、私の家の反対側にあったので、いつも、私は街の大通りを通って、登下校していた。

よくは覚えていないが、大通りを歩いている時、私には何かが起きていたのではと思う様な声が聞こえてきた。

「ごめんなさい。許して下さい。もう勘弁して下さい」

「ざけんじゃねえ。これっぽちで、俺を納得させられるとでも、思ってるのか？」

私は何が起きているのだろうと、その声の方に向かって歩き始めた。

「痛い！痛い！。やめてください」

悲しげな男の人の声はだんだん大きくなってきていた。どすっ。どすっ。

私には何かよく分からなかったが、そんな音も一緒に聞こえてきていた。

そして、私がたどり着いたのは、大通りの店と店の隙間の小さく、暗い場所だった。

私はそこで、一人の男の人が胸ぐらを掴まれた状態で、お腹の辺りにひざ蹴りを食らわされているのを見た。

「これは？何？男の人が悪者に襲われている？」

少しの間、私はあぜんと、その光景を眺めていた。

そんな私に最初に気付いたのは蹴られていた方の男の人だった。

「助けを呼んで来てくれ」

その言葉に、蹴っていた方の男の人はぎょっとしたような顔を一瞬私に向けた。

そして、その次にはこれは鬼かと言う様な表情で私を睨みつけ、

怒鳴った。

「てめえ。何見ていやがる。とっとと消え失せろ。誰にも言うんじゃねえぞ。」

分かったな！」

私はその言葉に恐怖し、逃げ出そうとした。

その時、私の脳裏に亡くなった母の言葉が横切った。

「悪い事は悪いと言わなきゃだめ」

突然、私の心の中に勇気が湧いて来た。

その通りだ。今、言わなきゃ。あの人に教えてあげないと。

「だめだよ。そんな事しちゃ。それは悪い事だよ」

私のその言葉に男は動きを止め、私を再び睨みつけた。

「何だと。このくそガキが。死にてえのか、こらっ！」

私は再びひるんだ。

私の足は震えていた。その震えは止めようとしても止まらない。

怖い。そう心底思った。

でも、私はもう一度、勇気を振り絞った。

「悪い事はしちゃだめなの」

その言葉は、その男の人を本当に怒らせたようだった。

さっきまで、胸ぐらをつかんでいた男の人を振り飛ばすと、私の方に向かってやって来た。

「ぶっ殺す！」

そう言って、その男の人は私に殴りかかってきた。

「殴られる！」

私がそう思い、目を閉じた時、絶叫が聞こえた。

「ぎゃー！」

私が目を開けると、さっきまで蹴られていた男の人が、私を殴ろうとした男の腕にかみついたのだ。

そして、そのかみつかれた男の人の腕は半分が砕けたとでも言うのか、惨い事に潰れて無くなっている。

その傷からは大量の血が吹き出し、私はその血で血まみれになっていた。

周りに立ちこめる血の匂い。その嫌な経験は二度目だった。

結局、その男は治療が間に合わず、出血多量で死亡した。

私に腕を握りつぶされた嘘だけを残して。

真実を求めて、警察は捜査を進めたが、襲われていた男が逃げ見つからなかったため、全ては闇の中となった。

そして、犯人が見つからないまま、私とその男の腕を握りつぶしたと言う噂だけが、広まって行った。

私はそんな事はしない。していない。

だって、私は私を助けるために、その男の腕にかみついている男の人の姿をはっきりと覚えているのだから。

この事件と関係があるのかないのか分からないが、その日以来、祖父は私に体育を見学させ続けている。そして、あまり人とも関わらないようにと釘をさされた。

白石の告白？

私は自分には身に覚えが無い、この男の人の腕を握りつぶしたと言う噂から一生逃れられないのではないかと思うと、暗くならざるを得なかった。

そんな私を由依は励まそうと思ってか、にこりとほほ笑んでいる。私は由依の気持ちに応えようと、にこりと微笑み返したが、どこか不自然だった。

その時、白石と目があつた。私は何だか、そんな心を見透かされたような気がして、目をすぐに逸らした。

「早川さん。元気だしなよ」

白石が言ったが、私はそんな在り来たりな言葉は不要だ。

そんな事で、元気になれる訳がない。

「僕はさ。あんな話、信じていないけど、たとえ万が一そうだったとしても、僕は早川さんが大好きなんだ」

私は耳を疑った。

今のは白石の告白か？

私のイメージでは、そう言う事は手紙や電話で相手にだけ伝えるか、二人っきりの時にこっそり言うものである。こんな大勢の前で言うことではないはずだ。

「おお！」

教室の中を大声が駆け巡った。

私は本気取っていいのか、悪い冗談なのかも分からないため、何の反応できず、驚いた顔をして由依の横で立ったままだった。

その日、私は色々な事があり過ぎて、家に着いた時はもうぐったりだった。

私の家にはいつの頃からだったか、監視カメラとかがそこら中に付いていて、セキュリティ万全である。祖父は大学病院の第一外科

部長だった事もあったが、それにしても大げさ過ぎるセキュリティだ。

「ただいま」

私はすぐにでも、ベッドに寝転がりたい気分だったが、私にはしなくてはならない事があった。それは夕食の準備である。

この家には私と祖父、そして河原真がいる。

この家の決まりでは、食事は見事なまでの当番制で、男も女もない。そして、大人も子供も無い。今日は私の番なので、疲れていても、食事を作らない訳にはいかない。

私は制服の上にエプロンをかけ、キッチンに立った。今日のメニューはクリームシチューである。冷蔵庫から、チキンの胸肉を取り出すと、私は一口大に切っていた。続いて、野菜である。人参、玉ねぎ、じゃがいも。

油を引いた鍋にチキンを入れて適度に炒めると、続いて野菜である。野菜も炒め終わると、小麦粉を振りかけ、もう一度軽く炒めた後、水を入れた。

コンソメとローリエを入れ、煮込み始めると、私はフランスパンを切り始めた。そして、生ハムのサラダの用意をした。

クリームシチューの仕上げは塩とコショウである。これで味を整えれば完成である。

私がそんなふうには、夕食を作っている間、祖父と真はリビングでソファに腰掛け、TVを見ていた。TVのニュースでは、何かの騒動を伝えているようだった。

独裁的で私腹を肥やしている大統領に対し、民主化運動が過激化し、それを鎮圧する。

そんなニュースがこの国では時々流されている。私の両親もその巻き添えで犠牲になっている。それだけに、またかと言う気持ちで、TVに目を向けた。

TVに映し出されている大勢の人が逃げ出すその映像、まさにその光景は両親が亡くなったあの日と同じように見えた。

幼き日の悲劇

あの日、4歳だった私は両親と真一家と共に、キャンプに来ていた。

私達は川原近くにテントを張り、バーベキューの準備をしていた。周りには同じような家族連れや、若者達で溢れていた。

「結希。危ないから、火に近づいちゃだめよ」

「うん。分かってるって」

私は食べ物より、川での水遊びの方に興味があつたので、バーベキューには見向きもせず、川に近づいて行った。

川の水は足を入れると、ひやりと冷たい感触が気持ち良かった。少し離れた所には小さな魚が泳いでいた。私は捕まえたくて、ひっそりと近寄ったつもりだったが、魚達はいち早く逃げて遠くへ行ってしまう。

「あん、もう」

私は逃げられた事が悔しくて、そう言った。私は川の中の生き物を追いかけるのに熱中した。

そんな私が楽しそうなのにつられてか、真もやって来た。

私達は目を凝らして、また魚を探す。少し先のきらめく水面に、多くの小魚が固まっているのを見つけた。私達はまたそっと近づき、捕まえようとする。しかし、小魚達が逃げるのは、やはり素早かった。

「あん、もう」

私は再びそう言うと、悔しさを我慢できず、足で川の水をばしゃばしゃした。

そんな時だった。銃撃音が耳に届いた。

「何？」

私は川の中で、立ち止まって、辺りを見渡した。

キャンプ場の大人たちも騒然としていたが、まだ何が起きたのか分からず、状況を確認かめようとしている感じだった。

このキャンプ場は大きな公園に隣接していたが、その公園にある野外ステージで、反政府集会が行われようとしていたらしかった。そこを、治安部隊が襲撃したのだ。

これが反政府的な国民に銃が向けられた初めての事件だった。想像もしていなかった事態にその場にいた多くの人達が、瞬間に凶弾に倒れた。治安部隊の銃撃から逃れようと、人々は治安部隊とは反対方向に逃げ始めた。その先には私達がいるキャンプ場があった。

しばらくすると、キャンプ場に逃げ惑う人々が到達し始めた。その異常さにキャンプ場にいた人達も逃げ始めた。

「結希！」

私の父が私を大声で呼んだ。

「真！」

真の母の声も聞こえた。

私は両親がいる場所から魚を追っている間に少し離れ過ぎていた。私は慌てて、父の所に戻ろうとしたが、その間には野外ステージの方から逃げて来た大勢の人達がいて、私にはどうする事も出来なかった。

やがて、銃声は近づき、あちこちで血しぶきが上がり始めた。

真はその人の波を越えようと突っ込んで行った。逃げようとする人々の間で、倒れる真の姿が人波の隙間から見えた。

「真ちゃん！」

私が叫んだ時、銃声はすぐそこまで来ていた。

私はますます怖くなって、両親の所に行きたかったが、目の前の人の波を越える力の無い私にはどうする事も出来なかった。私が恐怖に震え、立ちすくんでいると、私の目の前の人達も血しぶきを上

げ、倒れて始めた。

「怖い！」

私がそう思った時、目の前の男の人が倒れて来て、私に覆いかぶさった。そして、その上にさらに人が倒れてきた。

「重い！助けて！」

私はそう言いながら、何とか覆いかぶさって来た人たちの下から逃れようとした。私が足掻いていると、私の手に何か温かいぬるっとしたものが触れた。

何？

そう思いながらも、私は一生懸命そこから脱出しようとした。

そして、私はようやく、その人の下から、抜けだした。その頃には銃声は遠くに移っており、私の目の前に立っている人はいなかった。

私はさっき触った温かい物が気になったので、手を見た。そこにはべっとりとした血が付いていた。

「いやあー！」

私は絶叫しながら、手を振って、血を取ろうとした。取れない。嫌。助けて。お母さん、お父さん。

私は両親を探した。

さっきまで、父が火を起こして、野菜を焼き始めていたコンロはどこにあるのか分からなかった。あちこちにバーベキューの残骸が転がっていたが、そのどれが私の家の物なのか、分かることなどできそうにない状態だった。

私はあわてて、この辺ではと思うところに駆けより、両親を探した。そして、私は父と同じ服を着た人が倒れているを見つけた。

「お父さん！」

そう思って、駆け寄った。その男の人は頭の一部が無く、血まみれだった。

「違う。違う。お父さんじゃない！」

私は泣きながら、そう信じたかった。私はその事実を目をつぶり、母親を探した。

「お母さん！」

私は倒れている母を見つけ、駆け寄った。

「結希。大丈夫だったの。良かった」

それが私が聞いた母の最後の言葉だった。近くには真の両親も倒れていた。

幸い、真は一命を取り留めたが、後遺症は大きく、脳にも障害を負い、下半身不随で、何年も一人で私の祖父の大学病院に入院していた。

「私は両親を奪った政府と言うものを許さない」
その気持ちだけはずっと持ち続けてきた。

暴れまわる化け物

私がキッチンを出て、食器を並べ始めた時、TVが伝えている事件が私の想像とは全く違うものである事に気付いた。

映像に映し出された人々を襲っている者は治安部隊なんかではなく、何かの着ぐるみを着ているのか、それともムキムキマッチョが行きすぎた者か何かのようで、人間のようには見えなかった。

「何？それ？」

私は素直に声に出した。

私のその声にTVを見ていた二人が振り返った。

「あ？結希。ちょっと、私の書斎まで、来てくれるかな？」

振り向いた祖父は私の問いに答えず、脈絡もなくそんな事を言った。

「今？」

「今」

祖父がそう言うのと同時に真がうなずいていた。全く意味不明である。

私は何を考えているのか、これからご飯だろうと怒りたかったが、そこを抑えて話す事にした。

「おじいちゃん、今から御飯よ。クリームシチューが冷めちゃうでしょ」

「あ、そうか。それはすまなかった。食事の後でいいよ」

「はいはい」

私は少し面倒くさそうに、そう言いながら、食卓に夕食を並べて行った。

テーブルの上に並べられたクリームシチュー、生ハムのサラダ、フランスパンを囲み、三人は席に着いた。

「いただきます」

そして、三人は手を合わせて、そう言う食事 시작했다。
普段、三人での会話は多くない。

同じ年とは言え、真は男子である。私にとって、そう食事の時に
ぺちやくちゃと話す相手ではない。

祖父にだって、真の前で学校生活の話を私はしたくない。

私は黙って、目の前のパンを手に取り口に運んだ。

「ところで、結希ちゃん」

真が私に言った。真は学校では名字で私を呼ぶが、家では下の名
前で呼んでいた。

私は口にパンが入っていたので、返事をせずに真を見た。

真の顔は少しにやついている。

「何？」

パンを飲み込むと、たずねた。

「白石の事。どう思ってるの？」

「はあ？」

私はなぜ、そんな事を聞く！冷やかしか？と怒鳴りたかった。

「何の事だ？」

祖父が口を挟んでくる。

「じっちゃん。今日さ」

真はなぜか、私の祖父をそう呼んでいる。

実の祖父でもないくせに。

呼ばれている祖父自身が何も言わないので、私がとやかく言う問
題ではないのだが。

「結希ちゃんが、クラスメートに告られたんだよ」

「おお。そうか、そうか。」

そりゃあ、私のかわいい孫娘なんだから、当然かも知れんが。
で、どうなんだ？結希」

祖父まで、話に乗って来た。

白石の気持ちがよく分からなかったので、私はこの話はしたくな
かった。

そこで、この話は無視して、話題を変える事にした。

「そんな事より、さっきのあれは何なの？」

二人はお互い、顔を見合わせた後、話題を切り替えられた事に残念そうな表情で、話をしてくれた。

「何でも、銃弾も効かない怪人らしい。力も馬鹿みたいに強いって事以外、詳しい事は分かっていないようだ。

そんな怪人があちこちに現れて、警察署やら治安部隊の人やらを襲ったらしい」

私にとって、治安部隊と言うのはある意味仇であり、それがやられると言うのはうれしい事だが、その襲っている相手がこの化け物では複雑な心境にならざるを得ない。

「ふーん。治安部隊なんて、無くなってもいいけど、そんな事が本当にあるの？」

「あるから、起きてるんだろう。事実にも目を向けなよ」

真の言葉が何だか冷たく感じた。こいつはよくその言葉を私に向かって言うのである。

私は少し真のそんな態度にいらついたので、むっとした表情で口に運んでいたクリームシチューをすくったスプーンを止めた。

「いつも事実にも目を向けているわよ。

あれはそう言う装甲を着た暴徒よ。

パワードスーツ？そう言うものよ」

「残念だが、あれは装甲なんかじゃない」

祖父が落ち着いた声で、私に諭すように言った。

真の言葉とは違い、私には重みがある。

「じゃあ、何なの？」

「化け物にされてしまった人間だ」

「は？」

私には全く理解できない答えだった。

どう言う発想で出てきたのか？

祖父は大丈夫かとさえ思ってしまった。

「ねえ、人間だとして、どうして、銃が効かないの？」

私は少し冗談はやめてよねって、口調で言った。

「きつと、筋肉や骨が鋼鉄並みの強度なんだろう。」

今度は真が言った。そして、祖父もその言葉にうなずいている。

祖父に疑いを向ける訳にはいかず、真に言う事にした。

「真、まじで言ってるの？そんな事ある訳ないじゃん」

私は全く信じていなかった。絶対私の推測の方が正しい。そう思っていた。

「結希ちゃんは、信じたくないんだろうけど、事実にも目を向けないと」

また、それだ。

この言葉はとも、好きになれない。

「だからあ、私はいつも事実にも目を向けているわよ」

私はむすっとした表情で、パンを手を取った。

私の人差し指

私の家のルールでは、食事の当番の人が後片付けの当番でもあった。

私が食器を食卓から、片付けている間、あの二人はTVのチャンネルを変えながら、ソファに座っていた。そして、よほどそのニュースが気になったのか、そのニュースを探しては見ている。

私はキッチンで、一人仲間はずれ気分、食器を軽くゆすいで、食洗機に入れていった。

洗剤を入れ、食洗機のスタートボタンを押した。後は、機械任せである。

「終わったわよ」

私は少しうんざり気味な声で言った。

「では、書斎へ来てくれんか？」

待ってましたと言わんばかりの口調で祖父が言う。

「そのつもりです」

私は何度か祖父に呼ばれて、祖父の書斎に行ったことがある。

そこはそう広くはない部屋に、壁に沿って据え付けられた本棚があり、そこに医学やら遺伝子やらの本がずらりと並んでいる。

そして、大きな机があり、その上に大きなLCDディスプレイが置かれている。

その部屋に不似合いな私がそこに行って何をさせられるかは分かっている。

ただ、それに何の意味があるのかはいまだに分かっていないのだが。

祖父の後について、二階の祖父の書斎に向かって行った。ただ、今日はいつもとは違う所があった。真が一緒なのだ。

「何で、あんたも一緒に来るのよ」

「あ？じっちゃんは、そのつもりのはずだけど」

「おじいちゃん、真が言っている事は本当なの？」

「ああ。今日は真も一緒にじゃ」

「じゃあ、こいつもあそこに指を置くの？」

その返事に私は少し期待した。

いつも、そこでは私はパソコンにつながった何かの装置に指を置かされるのだが、その位置からでは祖父がパソコンで何をしているのか見えないのだ。

今回、真が指を置くのなら、私は祖父が何をしているのか、見る事ができると思ったのだ。

「残念だが、真はそんな事はしない」

「じゃ、何で一緒に来る必要があるのよ」

「私と一緒に、ちよつとパソコンで確かめてもらいたい事があつてな」

「ええっ。それじゃ、私だけ仲間はずれじゃない。一体、いつもパソコンで何しているのよ」

「まあ、気にするな」

「気にするわよ！」

私は不機嫌だった。

何をさせられているのか分からないと言う事だけでも、いい気はしないのに、真まで祖父側となれば感じ悪っ！てのが、正直な感想である。

そんな不機嫌になった頃、祖父の書斎に着いた。

「結希。いつものように、そこに座って人差し指を置いてくれ」

「パソコンはもう立ち上がっているの？」

手回しがいい事。分かりました」

私は指を何かの装置の上に置いた。

パソコンを挟んだ反対側では、祖父がキーやらマウスやらを操作して、何かをしている。

「やはり不完全体だ」

「同じですね」

真が目を見開いて言う。

「何が？」

私は本当に知りたかった。

「いや、何でもない」

完全に私は仲間外れである。

しばらく、二人でパソコンを触っていた。

「結希。ありがとう。もういいよ」

「よくない。二人で、何をしていたのよ」

「あ？パソコンを見ていたんだよ」

「そんな事、分かってます！パソコンで何をしていたのかって、聞いているんでしょ？」

「まあ、いずれな」

教える気は全く無さそうだ。

私はむっとしたので、書斎のドアを大きな音がするくらい、思いっきり閉めて出て行った。

「では、やはり山本が生きていた？」

「おそらくな」

「だとしたら、もしチップの存在に気付いたら」

「気付いている可能性は十分ある」

「あの時のことですか？本当にそうなんですか？」

「ああ。あれはきつとチップを探したに違いない」

「なら、チップの在り処が分かったら」

「これだけの事を平気でやるような奴だ。手に入れるためなら、手段を選ばないだろうな。」

最も安全な場所にあるとは言え、その場所を掴ませんことが大事だろうな」

「奴らが来た場合の準備はあれだけで大丈夫でしょうか？」

「足りんだろうが、これ以上は無理だ」

「あつ。データはセーブしておかないのですか？」

「ああ。危険だから、パソコンには落とさない事になっている」

私の耳には二人のやり取りが聞こえてきたが、山本と言う人物が何者なのか、チップとは何なのか、セーブしておくとは危険なデータとは何なのかは全く分からなかった。

そして、自分の右手の人差し指をじっと見つめた。

由依

二日後、体育の授業。私は今日も見学である。

私はやはり木陰の涼しげなベンチに向かい、腰をかけた。

なぜか、今日も白石は見学している。そして、さすがに私が座っているベンチに座ってはいなかったが、私の後について来て、私と同じ木陰の中で立っている。

なんだ？こいつ。私は心の中で思っていた。

「ねえ。早川さん。今日も、僕は見学なんだ」

白石は授業が始まってすぐに話しかけて来た。

「どうして？元氣そうだけど」

私は白石を見ず、グラウンドに目を向けたまま冷たく言った。

「そりゃあ、早川さんと話をしたいからだよ」

「前にも、言ったよね。私は一人が好きだって」

話されると邪魔だって」

やはり私は正面を向いたまま、さっきより冷たい口調で、そう言った。

目も合わさずの会話の拒否である。これで、撃退した！私はそう思っていた。

「そうそう。言ってた」

でも、僕も言ったよね。早川さんの事が好きなんだって」

動揺して思わず私は白石を見てしまった。目が合った白石は真剣な表情だった。

「それ、本気なの？」

そう言った私の声は上ずっていた。

「もちろんだよ。でなきゃ、みんなの前で、あんな事言わないよ」

僕の気持ちは真剣なんだ」

白石の顔は確かに真剣さが漂っている。

私はこんな事を言われたのは初めてで、どうしたらいいのか分か

らないばかりではなく、鼓動が高鳴り、頬が赤らんでいるのか、熱を感じた。

「私は」

好き？そんなはずはない。

何だか好きと言われた事で、少し揺れ動いているような気もするが、それはそう言われた事で錯覚しているだけで、好きになる理由も無い気がする。

答えが見つからない。

「早川さんは？」

白石は私の事を見つめて、私の答えを待っていた。

「そんな事、急に言われたって。

分からないわよ」

私は力を込めて、言った。

白石はがっかりするのかと思っていたら、意外とそんな事はないようで、少しほっとしたかのような表情を一度浮かべてから、話し始めた。

「じゃあ、嫌いって事じゃないって事だね」

変な奴と思いはしたが、嫌う理由は無い。

私は小さくうなずいた。

「いつか、好きにさせるよ」

こいつは一体何を考えているのだろうか？みんなの前で、あんな事を言ったり、今も信じられない事を言った。

この自信は何なんだろう。

私の想定する人間と言うものから、こいつは逸脱していた。私は返す言葉も見いだせず、しばらく目を合わせていたが、視線をそらし、グラウンドの方に目を向けた。そして、最初の言葉を言うことにした。

「もう一度言うけど、私は一人が好きなの。私の事が好きだって言うのなら、一人にしておいてくれない」

「分かった。邪魔しない程度にしておくよ。その内、僕がい

と寂しいと思ってくれるようになるまでは」

この白石と言う男子生徒は、私の理解を超えた奴だった。

そんなやり取りは体育の授業を受けているクラスメート達には、聞こえてはいないだろうが、何かを話している事だけは分かっただろう。授業が終わると、由依が私の所にやって来て、その話を始めた。

「ねえ。白石君と何を話していたの？」

「えっ？何って、何て事ないけど」

「白石君の事、どう思っているの？」

「何とも」

「じゃあさ、河原君は？」

「は？何で、あいつなの？」

「だって、一緒の家にいるじゃない」

「しっ！」

由依は昔からの友達だから、その事を知っているが、これは秘密なのだ。

はつきり言って、真は女子に人気がある。頭が良くて、運動神経がいい。女子に好かれない訳は無い。そんな真と一緒に家で暮らしているなんて、ばれたらどんな非難や嫌がらせが起きるか分からない。私は由依というか、そうでなければ一人であるようなタイプで交友関係が広くなく、その上悪いあの噂があるのだから、なおさらである。

もちろん、真もその事は隠している。それに真から言えば、他人の家だからか、昔から友達を連れて来た事もないので、昔からの真の友人も真の家を知らない。

「あ、ごめん」

由依は手を合わせて、謝った。私は周りに聞かれなかったかと、辺りを見たが、誰も聞いていた人はいないようだったので、私は安心した。

「あいつの事なんか、何とも想っていないわよ」

「本当に？」

「当り前でしょ」

「ねっ。じゃあ、久しぶりに結希んち行っていいかな？」

「いいけど。それは誰が目的？私？あいつ？」

「えへっ。両方にしておいていいかな」

「あいつか」

由依とは付き合いが長いから、私は知っている。由依は真に好意を抱いている。私は本当に真に好意は抱いていない。小さい時からいつもと言っているほど、そばにいたので、そう言う感覚より、家族に近い感覚なのだ。きっと、あいつもそうだろう。

真の部屋

由依の家は私と同じ方向にある。

なので、同じバスに乗って帰るのはいつもの事だ。ただ、私の家の方が遠いので、普段は途中で由依が降りるのだが、今日は私の家に来ると言うので、由依が普段使うバス停を過ぎても、二人で乗っていた。

いつもはここから一人なのに、今日は二人。ただそれだけだったが、何か新鮮な気がした。

バス停で降りると、しばらくは民家と田んぼが並ぶ小さな道を話をしながら歩いた。

由依は少し浮かれているのか、声がいつになく弾んでいる。

「由依。残念だけど、しばらく真は来ないわよ」

期待している真がいつ帰ってくるか分からない。

なぜか私は少し意地悪したくなって、そう言った。

「分かっているわよ。あのバスに乗っていないなかったんだもん。一時間は帰って来ないってことでしょ」

浮かれ気分に水をさされたためか、少しふくれっ面気味で由依が言う。

「そう。そう言う事です。よくできました」

「あんたねえ！」

私のからかったかのような言い草に、由依はそう言った。

そして、二人は顔を見合わせ、笑った。

やがて、私の家の敷地の前に到着した。門扉を開けると、家の建物まで続く石畳の小さな道がある。二人はそこを通って、家の建物まで進んだ。そして、私は家の建物の玄関のカギを開けた。

「ただいま」

「お邪魔します」

家の中からは返事は無い。

もう祖父は仕事を辞めているので、私が帰る頃には家にいる事が多いのだが、今日はどこかへ出かけているようだ。

私は由依を私の部屋に連れて行った。

私の部屋はベッドとクローゼット、机、本棚があるだけの普通の部屋だ。二人でベッドに腰掛け、話をしていた。女子高生の会話はあっという間に時間が過ぎる。気づくと、あれから2時間近く経っている。

「ピンポン」

その時、廊下で音がした。

これはチャイムではない。誰かがこの家の表のドアを開けた事を知らせているのだ。

この家のセキュリティは色んな事を教えてくれる。

もし、そのドアを壊していれば、この音はある音楽になるのだ。それが警報音でないのは、相手に悟られないためらしいのだが、警報音で威嚇したほうがいいと私は思っている。

「誰か帰ってきた」

私が由依に言う。

由依の顔に喜色が浮かんだ。真を期待しているのだろう。

私は窓から下を見た。由依の期待通り真だった。

「帰って来たのは真だよ」

「河原君？ここに呼ぶ？」

あの白石の行動力に刺激を受けたのか、由依もえらく積極的だ。しかし、私の部屋に呼ぶのはごめんだ。

「それは無し。由依が真の部屋に行ったら？」

「えっ？入れてもらえるかな？」

「さあ？言ってみたら。でも、入れてくれたとしたら、たぶん初めての女の子だよ」

そこまで私が言った時の由依の表情は驚きとうれしさが入り混じ

った感じだった。

その表情で、私はその言葉に続けて言うはずだった私以外のと言う言葉は止めておくことにした。

「本当に？」

続いて、由依がそう言った時の表情には闘志がみなぎっているように見えた。

どうも、私の言った言葉が由依の心に火を点けたようだ。

長い付き合いだ。私は由依の願いを叶えさせるため、由依にある作戦を授けた。

「ただいま」

階下から真に声がした。

私は部屋を出て、真に声をかけた。

「おかえり」

「おかえりなさい」

背後から由依が言った。

「あれ？川嶋さん？」

階下で真が言う。

「はい！川嶋です」

自分だと声で分かってくれた事で、由依は少しうれしそうだった。私はそれだけでなく、私が家に連れてきている友達と言う所でも判断したのだと思っていたが、あえて由依には言わないでおくことにした。

「真。ちょっと来てよ」

「何か用？」

そう言いながら、真が階段を上がって来た。私は由依と一緒に廊下に出ると、私の部屋のドアを閉めた。

「お邪魔しています」

由依が真に言ったが、私はそれはちよと違う気がした。

私から言わせれば、居候である真に言う言葉ではないと思うのである。

「あ、いえ。

で、何？」

真は私に呼んだ理由を尋ねて来た。

「由依が真の部屋見たいって」

「は？俺の部屋？」

「はい」

私が肯定するより早く、由依が答えた。

「何で？」

「好きな人の部屋に入ってみたいんです！」

とは、言う訳にもいかず、その答えに由依が困っているようなので、代わりに適当な答えを私が言う事にした。

「男子の部屋って、どんなだろうって、話になったのよ。興味あるじゃない」

「そうそう」

由依は思いつきり、私に同調した。真はちよつと、迷っているようだ。まあ、そりゃそうだろうが。しかし、由依のためにも、ここで引き下がれない。

「何か、入られると困る事でもあるの？いや、物かな？」

「ばか言うなよ。何もないよ」

「じゃ、いいじゃない。行こう！」

私はそう言うと、由依の手を引っ張って、真の部屋に向かった。

真の部屋は階段を挟んで、私の部屋の反対側にある。

「おいおい！」

真はちよつと焦った表情で、私達の行く手を遮ろうとした。

「何よ。いいじゃない」

私は由依をひじでこついた。私のサインを読みとった由依は、手を顔の前で合わせて、お願いの仕草を取った。

「お願いです。一度だけ、見せてください」

由依はそのポーズで、頭を下げたままじっとしている。

「うーん。困ったなあ」

お前は女の子の願いを断れる奴じゃないはずだ。私はいつ真が折れるか待っていた。

「少しだけだよ」

「はい。ありがとうございます」

由依はすぐうれしそうに、そう言って再び頭を下げた。

真の部屋に入った事は何度もある。でも、それは二人が小さかった頃のことだ。私もそれなりの年になってからは、真の部屋には入った事がない。

私達が入ったそこは私が知っている小さかった頃の部屋の雰囲気とは打って変わって、知性に満ちた部屋となっていた。

本棚に並んでいる本は難しそうな本ばかりだ。遺伝子やら電子工学やらの専門書が並んでいる。私は目が点になった。

「わあ、すごい」

由依は感心していた。はっきり言って、私も感心してしまった。

「真、えらく難しそうな本が並んでいるけど、こんなの読んで分かるの？」

「ははは。分からなきゃ、買ってもしかたないだろう。勉強してるんじゃないか」

「何のために？」

「あ？色々さ。」

学校でもずば抜けた奴だけに今さらだが、こいつはいつから、こんな頭が良くなったんだろうと言う疑問がわき上がってきた。幼かった頃は私と馬鹿な事しかしていなかった。

それどころか、あの事件で負った怪我が原因で脳にも障害を負い、ずっと入院して寝たきりに近かったはずだ。

その真が頭がよく、運動神経も抜群。一体、どう言う事なんだろう。

事実を目を向けろ!?

「そう言えば、真はいつから、こんな頭良くなったんだ?」

私はついつい心に思った事を口に出してしまった。

「は? 本当にお前は」

こいつは素が出ると、私の事をお前と呼ぶ。

まあ、私も口には出さないが、素ではこいつと心の中で言う事もあるので、ある意味おあいこかも知れないが。

「何よ」

「まあ、これは小さかったから、本当に記憶がないだけかもな」

「は?」

私には真の言葉の意味が全然理解できなかった。

「どう言う事よ?」

「まあ、これは事実から目をそむけているんじゃない、本当に記憶が無いだけかもってことだよ」

私はその言葉がいつも引っかかっていた。

「由依。こいつに、事実を目を向けろって、言われた事ある?」

「えっ? 私?」

私はこくりとうなずいた。

「無いけど。と言うより、そんな会話する機会、多くないし」

まあ、それはそうか。私は家にいても、こいつと顔を合わせる機会が多いのだから、それだけの事かも知れないが。

しかし、いつも口にする事実とは目の前の話題の事なんだろうか?

それとも、もっと別の何かを言っているのだろうか?

そう思った時、嫌なあの事が思い浮かんだ。

「もしかして、事実って、あんた、私の事を疑っているのか?」

私は拳を握り締め、震える声で言った。

私の感情の昂りと、言っている意味を真は悟ったようだった。一瞬、悪かったと言う様な表情をした。

「違うよ。結希ちゃんが、今思った事なんかじゃない。もっと、大きな話だ」

「もっと大きな話？」

私にとっては、あれ以上大きな話はないぞ。

真が私を疑っているのではない。それは私に安心を与えた。

しかし、真が言うもっと大きな話には心当たりは無く、気分はすっきりしない。

私は首をかしげながら、記憶をまさぐった。

「まあ、いいじゃないか。もうよそう。僕は結希ちゃんに感謝しているんだから」

話を打ち切りたかったのか、真がそう言った。

感謝。

これも心当たりが無い。こうして話してみると、意外と分かり合えていない関係だったようだ。

「何で？」

「だから、僕が元気になれたのは結希ちゃんのお陰だってことだよ」

「意味分からんし」

そんな二人のやり取りに、少し由依が戸惑っているのを感じた。

こんなにローカルな話をされては、話に入りたくても入れない。私は反省した。

「さ、話を変えて、真の部屋探検！」

私は右手を上げながら、左手で由依を引っ張って、真の部屋の奥に進んで行った。

遺伝子操作された人たち

私がそんな日々を送っている間にも、あの化け物はあちこちに出没していた。

ただ、警察や治安部隊側も、馬鹿ではない。攻撃を変えることで、化け物にも傷を負わせるようになっていた。真が言ったように骨や筋肉が鋼鉄並みだったとしても、弱い部分はある。

目やのどなんかはどうしようもあるまい。

いや、物理的攻撃にこだわらなければ、もっと選択肢は広がるはずだ。

政府側はまだ化け物を葬ってはいないが、傷つけて撃退出来たりするようにはなっていた。

そして、あの化け物が流した血液から、DNAが解析された。

この国のトップはもう数十年君臨している松下大統領だ。

若い頃の事は知らないが、今では国民の多くがこの男の事を嫌っている。

その理由は簡単である。

国家のためではなく、私利私欲で国を動かしているからである。

しかし、選挙と言う手法を奪われた国民にはこの男を引きずり降ろす具体的な手段は無く、反政府デモを行うのが関の山だった。

ただ、それさえも、この男は治安部隊を使って、鎮圧するため、デモも命懸けだった。

子豚ならぬ大豚並みに太った大統領は、執務室の椅子に腰かけている。特注で作った幅広の椅子でさえ、この男が座ると小さく感じられた。

そして今、大統領の前に立っている男は、最新の情報として、あの化け物のDNAの解析の結果を報告していた。

「つまり、あれはほとんど人間に近いと言う事か？」

「はい。あるいはミュータント。遺伝子操作。そんな所かと」

「遺伝子操作？」

大統領が椅子を反転させ、男たちに背を向け、何かを考え始めた。そして、男たちの方に向き直ると、昔の話を始めた。

「今から、10年ほど前だったかな。ある研究所が遺伝子操作技術を開発した。それは生きている人間の遺伝子を組み替えて行くと言う技術だ」

「生きている人間のですか？」

「ああ。本来は医療技術として、開発されていた。たとえば、遺伝子が原因の難病があったとして、その患者の問題となる部分の遺伝子を入れ替えることで、治療できると言うものだ。」

元々はそれが開発の出発点で、その基本技術はかなり以前に完成していたらしい。しかし、理由は知らんが、その研究所は技術を公表することなく、更なる研究を続けた。

そして、その結果、研究成果はさらに高度に進化した人間を作り出す所にまで昇華した。

私はその技術の存在を知り、研究所を接收しようとしたのだ」

大統領はそこで一度言葉を止めた後、にやりとした表情を浮かべ、話を続け始めた。

「危ない技術ほど、欲しくなるものだからね。野望を抱く者にとってはね」

再び言葉を止めると、今度は忌々しげな表情をして、話を続け始めた。

「しかし、その前日にその研究所は灰塵と歸した。全ての研究者と共にな。」

おそらく、自ら火を放ったのだ。奴らはよほど私にその技術を渡したくなかったのだろう」

「では、今回の騒動はその技術で作られたある意味、改造人間だと？」

「その可能性はある。あの研究所の関係者か、全く別の者かは分からないが、技術的にはそう言うものの可能性はある。」

実際、その焼け跡から見つかった遺体の数は、そこの職員の数より一人少なかった」

「分かりました。では、その研究所の線から、追ってみます」

男はそう言うと、大統領執務室を後にした。

バクテリオファージ

ここに、もう一人男がいた。

その男がいる部屋の窓からは多くのビルが見えていた。その窓を背に男は机に座り深刻な表情で書類を眺めている。そして、その前には一人の男が立っていた。

書類を読み終えると、男は不機嫌そうに書類を机の上にぱさりと投げ捨てた。

「奴ら一体を作るのに半年はかかる。

君のこの報告書に書かれている奴らの負傷状況から見積もれば、我々はじきに使える駒が無くなってしまう」

男は彼が奴らと呼ぶ世間を騒がせている化け物たちの負傷状況が予想以上のペースであったため、描いていた作戦に狂いが生じ始めている事を悟り、不機嫌になっていた。

男は気分を落ち着かせようと、深呼吸を一回した。

そして、腕組みをすると、目を閉じた。

男はこの問題を解決する手段に心当たりはあった。ただ、その具体的な情報が無かった。

男はその情報を具体化するため、昔の記憶をまさぐり始めた。

当時、すなわち今から10年ほど前には、すでに高速治癒の遺伝子とそれを組みかえるための酵素の技術は完成していた。

「分かりました。お父さん。その男の子が両親を亡くしてしまつた結希の大事な友達だと言うのなら、やりましょう。ただ、この事は結希にも言わないでくださいよ」

所長はそう言って電話を切ると、三人のリーダーを所長室に呼び集めた。

その呼び集められた3人とは、

一人は脳を高度に活性化させるよう遺伝子を組み変える技術を担

当していた者、

次は神経活動を早めるように遺伝子を組み換える技術を担当していた者、

そして治癒／再生能力を極限まで早く機能するように遺伝子を組み替える技術を担当していた者だ。

所長はその三人にそれぞれが持つ技術で、一人の男の子の治療を行うと言った。

それからしばらくして、その男の子が研究所に連れてこられた。移動式ベッドに横たわったままの状態で、運動神経だけでなく、意識はあるものの脳の損傷も大きいのではと思われた。

ベッドの上に横たわる男の子に向かって、所長が語り始めた。

「君には特別な治療を施す。

すでに君の病院の先生から聞いていると思うが、これはまだ発表していない技術なんだ。

それだけに、この事は誰にも話してはいけなくて、もしかすると悪い影響が出るかも知れない。それでも、いいんだね」

男の子はまぶたを閉じて、Yesの意思を示した。

「では」

所長がそう言うと、三人の男たちはその場で次々とその男の子に注射を始めた。

そこには特別なバクテリオファージが組み入れられていた。

体内に入ったバクテリオファージは次々と細胞に侵入し、自身を複製しようとするのだが、バクテリオファージが複製されるだけでなく、彼らが開発した遺伝子が生み出す酵素の働きで、細胞内のDNAの特定の一部を切断し、別の遺伝子と組み替えると言う動作になってしまっている。

やがて、免疫機構によって、バクテリオファージが駆逐される頃には細胞の多くがDNAを組み替えられている。そして、その新し

い遺伝子が組み込まれた細胞が分裂を繰り返し、やがては全てが入れ替わる。

この技術の基本的な方法は確立されていたが、組み替えたいDNAの位置によって、バクテリオファージへの細工や酵素を変える必要がある、この組み合わせを見つけるのが大変な作業だった。すでに当時この男の子の治療に必要な組み合わせは見つけられていた。

ただ、所長はこの事を男の子に治療と言っていたが、この治療にあたった者達はこれが人体実験であると知っていた。もちろん、所長もそのつもりだった。何しろ、同時に複数の遺伝子組み換えを人間でやった事は無かったのだから。

そして、この所長はそんな事を平気でやる男だった。

これまでも、人体実験を繰り返していたし、それに伴って死者も出ていた。いや、成功しても闇に葬るため、この世から消された試験体の数も分からないほどだ。

あの所長はよく言っていた。

「人が神に近づくために多くの人が犠牲になるのは仕方の無い事だ」と。

そして、この男の子は当初バクテリオファージが体内に侵入した事による免疫反応などで、高熱を出したが、見る見る回復し、半年後にはこれがあの患者だったのかと言うまでに回復した。

「本当に、ありがとうございました」

その子供は自分がただの実験材料だったとは知らず、そう言って、元気に去って行った。

細胞内に完全にあの治癒／再生の遺伝子が組み込まれておれば、傷つけられても、ほぼ時間をおかず、完治する。

「やはり、あの技術が欲しい」

男は一度目を開くと、そう呟いた。

そして、その技術のありかの手がかりを得ようと、目を閉じ、再び過去の記憶を呼び戻そうとしていた。

マイクロチップ

あの日。研究所が焼け落ちた日。

男たちは状況の報告を所長に行うため、所長室に入って行った。

所長は所長席に座って、男達の報告を受けていた。

その時、所長の机の上には小さなマイクロチップが書き込み装置に組み込まれた状態で置かれていた。そして、かすかだがパソコンからはハードディスクが動作し続けている音がしていた。

データをコピーしているのか？全消去じゃなかったのか？

そう思った者が他にいたかどうかは分からないが、少なくとも俺は思った。

男たちは手にしていた組み換え用のウイルス試料を一本ずつ持ってくるよう命じられていたため、報告が終わると、それを所長に手渡した。

「やはり、マイクロチップはどこかにあるはずだ。あそこには全データがあるに違いない。ではどこに？

いや、それだけじゃない。あの試料は何のために必要だったんだ？複製用か？」

男は頭の中に当時のイメージを再生し、そのチップの在り処を求めて、記憶の世界に入って行った。

「明日、ここに政府の者たちが来る前に、全てを処分する。

残念ですが、この職場でお会いするのは今日が最後です。

最後に乾杯をして、別れにしたいと思います。

皆さん。お近くのお好きな飲み物を」

所長が言った。その言葉に所員たちも思い思いの飲み物をグラスに注ぎ、手に持った。

「乾杯！」

全員がそう言いながら、グラスを差し出し、グラスを飲みほしたが、俺は口にできなかった。

人を殺す事を躊躇わない所長の事だ。この技術を封印するために、我々を殺す事を躊躇わないと思ったからだ。

「本当に守りたい秘密は誰にも言わないか、それとも知っている者たちを消し去るかのどちらかだ」

私自身そう思っているくらいだ。あの所長なら、なおさらだ。

案の定、しばらくするとみんなは突然倒れ始めた。苦しむことなく、突然倒れこむような毒を使ったのはあの所長にしても、俺達にはやはり情が少なからず移っていたのかもしれない。俺も倒れたふりした。

所長は全員が倒れた事を確認すると、一人立ち去った。俺はもしかすると、自分だけ逃げ延びる気ではなかったが、そこまでの悪ではなかった。所長は書類や設備を処分するため、火を放ち始め、やがてその炎の中に身を投じた。

火が広がるまでの時間だったが、所長室に忍び込み、部屋の中を探したが、マイクロチップは無かった。

いや、それだけじゃない。あの日、所長室に持って来させた試料も見当たらなかった。そして、すでに何かに使ったのか、試料が入れられていたと思われるガラスの破片だけがごみ箱の中にあった。

侵入者

「時間が短すぎて、探し出せなかった」

男は悔しそうな顔をした。その一瞬の後、目を見開いた。

「いや、やはりマイクロチップは別のどこかに持ち出されていたはずだ。

どこに？

あの日見た姪っ子を連れた男。それが所長の父親だと分かった時、一番に疑った。そして、留守の間に家捜ししたが、何も出なかった。小さすぎるからか？

あの家のパソコンの中にも、それらしいデータは無かった」

男はゆっくりと目を閉じると、上を向いて黙り込んだ。

「しかし、あの男以外あり得ない」

そう言うのと、机の上の電話を手に取り、どこかにかけ始めた。

私はパジャマ姿でベッドの中で眠っていた。まだこの季節、深夜ともなると気温は低くなり、カーテンを閉じた窓からも、ひんやりとした空気が漏れてきて、部屋の中は少し肌寒くなってきていた。

私は夢の中で、音楽を聴いていた。

「あれ？この音楽、どこかで聴いたことが。

どこでだっけ？」

何か気づかないといけない気がするのだが、それが何だか分からず、やきもきしだしていた。その時、夢から覚醒に急速に私は進み、音楽の意味を悟った。

「侵入者！」

私が目を覚まし、ベッドから飛び起きた時、部屋のドアが開いた。私は一瞬身構え、それが誰なのか目を凝らした。

真だ。

安心したのもつかの間、パジャマを着たこんな姿を見せたくはな

いので、あわてて布団を巻きつけた。

「早く。誰か侵入してきた」

真が急かす。

「でも」

私にも乙女の恥じらいがある。パジャマ姿は見せたくない。

「でもなんて、そんな事言っている場合じゃない」

真はえらく真剣で、危機を感じ取っているようだ。そんな切迫した状況ではなく、ただの間違いや、すぐに引き上げるのではと言う楽観していた私とは大きく温度差があった。

「早く」

そう言っ、真は私の腕をつかみに、部屋の中まで入ってきた。もうご勘弁。

私は正直そんなところだったので、真に出て行ってもらうために、ベッドから立って、部屋を出る事にした。

「でも、どこへ？」

「地下室」

「地下室？」

この家にそんなものがあるなんて、私は知らない。

何で、私の知らないような事を、この居候が知っているのか？聞きたいところだったが、そんな暇を与えてくれそうにもなかった。真は私をぐいぐい引っ張って、一階に連れて行った。

一階のキッチンには祖父が立っており、キッチンの床が開けられていた。

「さ、早く」

祖父までが、そう言っていることで、私はこれが本当に危険な状況になっているんだと悟った。私の顔はこわばりだしていた。

「はい」

私はそう答えると、その地下室の階段に足を入れた。続いて、真や祖父が来るのかと思っていたら、中に私が入ると、祖父は地下室

への入り口を閉め始めた。

「待って。おじいちゃんや真は？」

「そこに隠れるのはお前だけだ。私達は外で戦う」

「戦う？誰と？泥棒？」

「話は後だ」

祖父はそう言うのと、地下室に通ずる階段が隠されている床を閉じた。

撃退！

建物の玄関を開けようと、誰かが手をかけた。その瞬間、暗闇に一瞬青白い光が放たれた。

「感電しました」

真が言う。

「うむ。玄関を開けようとしたようだな」

この家の異常なまでのセキュリティモードを最大警戒に設定すると、侵入者が確認された状態で、鍵がかかった玄関のドアに触ると、高圧電流が流れるのである。そんなドアに触ってしまえばただではすまない事になる。

はつきり言って、殺人兵器だ。こんなもの普通の家にあってはならないものだし、使う事は無いと思っていた。

ここで、一人退治したはずだったが、続いて玄関で爆発が起きた。モニターを見ていた祖父はドアノブに触ったあの化け物が感電した後、吹き飛んだように見えた。

「今の爆発は何だ？」

祖父が呟いた。

爆発は周りの侵入者も吹き飛ばした。

しかし、侵入者全員を倒したと言う訳ではなかった。侵入者の内、普通の人間はさっきの爆発で片付いてしまったが、もう一人いたあの化け物は爆発の中、踏ん張って立っていた。しかも、すでに玄関は吹き飛ばされており、高圧電流と言う信じられない手段で、中に入ってくる事を防ぐ事はできなくなっている。

「来るぞ」

「はい」

二人の息はぴたりとあっているとさえそうだった。

ドアが吹き飛んでしまった玄関から中に残りの一体の化け物が入って来た瞬間、廊下の床が開いた。いわば落とし穴である。化け物

は深い深い穴に落ちて行った。

敷地の中に入ってきていた二体の化け物を含めた侵入者たちはあ
っけなく一掃された。とは言え、二人の緊張の糸は張り詰めたまま
だ。

祖父は監視カメラで、辺りを細心の注意を払って、確認し始める。

「他には怪しげな者はいない。

さっきの爆発で人間の方は吹き飛んだのだろう。

化け物も2体だけで、すべて片付いたようだ」

「不審な車が道路に止まっていますが、人はいないようです」

「奴らが乗ってきた車かも知れんな。

結希を出してやってくれんか」

「分かりました」

真はそう言うと、私が隠れている地下室に通じる床の扉を開けた。

地下室は狭くはなかったが、決して居心地のいい場所ではなかつ
たので、地下室への入り口が開けられた時はほっとした。そして、
私は二人の顔を見て、さらにほっとした。

「で、何だったの？」

「あの化け物を連れた強盗だな」

「えっ！あの化け物はどうしたの？そう簡単にはやつつけられな
いんですよ？」

「ああ。そこはじっちゃんとか俺の頭があればね」

「まじ？本当にやつつけたの？」

「理由は分かんが、一体は爆発して吹き飛んだ。一体はこの家
の中におる」

「えっ？じゃあ、どうするのよ？」

「心配するな。深い深い、上がってこれそうもない落とし穴の中
だよ。

見てみるか？」

「いらないわよ。そんなの。でも、そんな落とし穴って、どこにあったのよ」

「あ、玄関を上がった所の廊下にあったんだよ」

真が平気な顔で言う。また私の知らない事をこいつが知っている事に、私は少しむっとした。

そんな会話をしていると、爆発を聴いた近くの住民が呼んだ警察が駆けつけはじめた。

パトカーのサイレンが近づき、家の前で止まった。

監視カメラの映像が映し出されているTVにはパトカーから降りてやって来る警官たちの姿が映っている。

「落とし穴に落ちないよう、行ってやれ」

祖父が真に行く。真はうなずくと、玄関に向かって行った。

落とし穴

真が向かった玄関の前で警官たちが、その状況に啞然としている。近づく真を見つけた警官は、真にたずねた。

「何があった。爆発があったと聞いているが、大勢の人間が倒れているぞ」

「はい。その人たちはこの家に押し入ろうとした人たちです」
「何？」

「それが、なぜ倒れている？」

「はい。よく分からないのですが、襲ってきた者の中にいた化け物が突然爆発したんです。化け物って、あれですよ。皆さんのお仲間である警察官や治安関係者を襲っているやつですよ」

「何？ 本当か？」

「はい。しかも、爆発してしまった奴以外の一匹を捕まえています」

「捕まえている？ どこに？」

「あそこです」

真が化け物を閉じ込めている落とし穴を指差す。警官たちの顔色が変わった。警官たちは慌しい動きになり、一人が本部に指示を仰ぐため、戻って行った。

残っていた警官たちが恐る恐る落とし穴を覗き込んだ。中は深く、しかも夜と言う事もあって、のぞいただけでは底は見えない。一人の警官がライトを取りに戻った。すぐにライトを取って戻ってきた警官は、落とし穴の中を照らした。

そこには、深い穴の中でぐったりしている化け物の姿があった。

「間違いない。あれだ」

「完全な状態の一体だ」

「ああ。これはもしかしたら、手柄かも」

「そうだな」

警官たちの表情が一瞬緩んだ。しかし、その次には厳しい表情で、真を見た。

「しかし、何で民家にこんなトラップがあるんだ？」

警官は真の方を向いて、強い口調でたずねてきた。

「あ、はい。以前、泥棒に入られた事があって、そのためセキュリティを考えて、造りました」

「お前、これが人間なら、死んでるんじゃないか？」

「は？平気で人を殺すような鎮圧をしてるお前らに言われたくない」

全く人は自分の事を棚に上げて、他人を平気で非難する。

それが滑稽な発言だと気づかず。

そんな言葉が脳裏によぎったが、真は大人である。

「もちろん、化け物だと言うのを確認したから、使ったんですよ。人間には使いませんよ」

へらへらと媚を売るような口調で真が言う。

そんな頃、指示を仰ぎに行っていた警官が戻ってきた。

「このまま、逃げられませんよね？応援部隊がここを取り囲み、明るくなってから、穴から引き上げ、連行するそうです」

「分かった。それまで、外の現場検証と事情聴取をしよう」

そう言うのと、警官たちは私の家の庭に飛び散った男達の破片の状況を調べ始める共に、私達にも事情を尋ね始めた。

ただ、私だけは隠れていたと言う事で、事情聴取はすぐに終わり、一人二階に上がり、ベッドの上に横たわった。

風向きによっては、家の中にまで入ってくる血のにおい。そして、警察、つまり政府側の治安関係者と言う私が許せない相手が近くに

いて、祖父や真が事情を聞かれていることで、私はとても嫌な気分になり、悶々とした気分のまま暗闇の中、ほのかに見える天井を眺め続けていた。

不安なひととき

次の日、私が学校から帰ってきた時、玄関辺りには何人かの人たちが壁を修理するため、工事をしていた。素人の私が見た感じでは、修理の状況はまだまだと言ったところで、今日中には終わらなさそうな気がした。

「お疲れ様です」

私は働いている人たちにそう言った。作業をしている職人さんたちは軽く会釈を返してきた。

私はそんな職人さんたちの横を通って、家の中に入って行った。

「ただいま」

家の中から、返事はない。工事の人たちがこんなにいるのに、どうしていないのかと思った時、背後から声がした。

「家の人なら、化け物を連れて行った警察かなんかの人たちに、連れて行かれたよ」

「は？ どうして、また？」

「参考まで事情を聞きたいと言っていたよ」

「ありがとうございます」

私はそう言い、頭を下げた。

この国の治安機関と言うものを信用していない私は、祖父の事が心配で心配で仕方なかった。しかし、今の私にできる事はない。真が早く帰ってきて、この話をしたい。ただ、それだけだ。

「そう言えば、昼前まで、この辺りには警察だけでなく、報道陣がつめかけていたよ」

背後から、そんな言葉も聞こえてきたが、もう私の心の中にそんな言葉を吟味する余裕は無かった。

真が帰って来たのは一時間ほどしてからだった。私が一人で家で

待っていたその時間は、それ以上の長さを感じていた。それだけに、私はいてもたってもいられず、二階から一階まで駆け下りて行った。
「真！」

私はそう言うと、真のところまで走りより、真の腕のあたりを両手でしっかりと掴み、真の身体を揺さぶった。

玄関の工事をしている職人さんたちの視界の中だったが、私はそんな事を気にしている余裕は無い。

「どうしたの？ 結希ちゃん」

「おじいちゃんが、連れて行かれたって！」
「どこに？」

真の表情もこわばった。

「参考まで事情を聞きたいって事らしいんだけど。詳しい事は分からない」

「大丈夫。すぐ帰ってくるよ」

今度は真が私の腕を持って、落ち着けと言わんばかりの表情で、私に言う。

真の言葉と表情は少し私を落ち着かせたが、それでも私の不安は打ち消されてはいない。

「でも」

私はその不安を口に出した。

「大丈夫。落ち着いて。僕が電話で調べてみるよ」

「うん」

私はうなずいた。情けない話だが、私自身では何もできない。でも、真なら何とかしてくれそうな気がした。

真はリビングに行くと、警察やら関係しそうなところに電話をかけ、祖父の事を知っている関係者を探し始めた。しかし、隠しているのか、それとも本当に知らないのか、祖父の事を知っていると言話はどこからも聞く事ができなかった。

横で真の電話を聞いていた私はそんな状況を感じ取り、一旦おさ

まりかけていた不安が再び大きくなり、表情には悲壮感があふれていた。真は私を落ち着かせようとしてはくれていたが、それだけの安心材料を見つけられず、真自身にも焦りが出始めていた。

日が落ち、辺りが暗くなってかなり経った頃、階下から工事が終わったとの連絡があった。

玄関のドアが壊れたままだと、危ないため、何が何でも終わらせると言うことになっていたらしい。

時刻はすでに午後9時にさしかかっている。

外の暗さも手伝って、しだいに真も不安になってきている気がした。

「ピンポーン」

そんな時、廊下で音がした。

祖父が帰って来た以外ありえない。二人は慌てて立ち上がると、玄関に向かった。

「ただいま」

祖父はいつも通りの声で帰ってきた。その元氣そうな姿を見て、私は安心した。そして、祖父に飛びついて、抱きついてしまった。

二人だけの秘密

ほっとした私は涙腺が緩んだのか、頬を涙が伝っていた。

「おいおい。結希」

祖父が照れた表情で言う。

祖父から聞いた話では、

叔父の研究に関して何か知らないかとか、

今回襲われた理由に心当たりは無いかとか、

と言った事を聞かれたらしかった。

「叔父さんの研究？」

私はそう言えば、あの研究所には両親を失ってから叔父が親代わりだったため、何度も遊びに行ったことがあるが、幼かったため叔父が何を研究していたのかは私は知らなかった。

「そう言えば、何を研究していたの？」

私は真剣なまなざしで、祖父にたずねた。

「まあ、医学的なものだが、私の専門外の分野なので、詳しい事は知らないんだよ」

「そうなの？」

「ああ」

私は祖父の口調に、何か隠していることを確信したが、知らないと言うものを聞き出すことはできないと思い、それから先は言わなかった。

代わって口を開いたのは真だった。

「結希ちゃんは、研究所には行ったことあるの？」

なぜ、真がそんな事を聞きたがるのか？と思ったが、そのまま答えることにした。

「うん。小さい時に遊びにね。と言うか、叔父さんは私の親代わりだったんで、私を一人にしないために、時々研究所に連れて行かれてたんだ」

「それだけ？」

「それだけって？」

「いや。遊んだだけかって事。他に何かしたとか、されたとか」

「意味分かんない」

「本当に」

真は少し不満げにそう小さな声で呟いた。私はその言葉に、いらつと来た。

「何が言いたいのよ。はっきり言いなさいよ」

「いや。何も」

「まあ、待て。とにかくだ」

二人がもめそうな雰囲気になったので、祖父が口を挟んで、その話題を打ち切った。

私としてはすっきりしない気分だったが、祖父が止めたのに蒸し返すのも何なので、祖父の話の続きを待った。

祖父は一呼吸置いてから、真剣な表情をした。

「奴らが、また来るかも知れん」

「はあ？ まじ？ 何で？」

私は驚きでいっぱい、そう言った。そして、それは真も同じだろうと思って、真の反応を見たが、真は想定内だったようで、その言葉に真剣な表情でうなずいている。

何だか私には分からないが、この二人には何か思い当たるものがあるようだ。私はそれでは一人仲間はずれであり、事実を知っているのと知らないのでは、対応を誤るではないかと言うという事で、その話を聞こうと思った。

「二人は何か知っているの？ どうして、襲われたか？」

もしかして、叔父さんの研究と何か関係があるの？」

私の真剣なまなざしに、二人が顔を見合わせた。

そして、祖父がぷつと吹き出すと、真まで大笑いを始めた。

「そんな事あるわけじゃないじゃないか」

真が笑いながら、私にそう言う。

「本当に？」

私は祖父を見つめながら、そう言った。

祖父は私の方を見ながら、うなずいて見せた。私はそれでも、納得はできなかった。私の知る限りでは、民家をあの化け物が襲ったのは今回が初めてであり、それも多くの人間も一緒に来たと言う事はそれなりの理由があったはずである。しかも、この家にはそれを防ぐだけのセキュリティと言うか、トラップもあった訳で、ある意味、こうなる事を予期していたとしか考えられない。

私はもう一度聞こうか、諦めようかと迷った後、もう一回だけ、聞いてみる事にした。

「じゃさ、何で、この家にはあんなトラップが用意されていたの？」

「何を言っておる。この家は以前泥棒に入られ、荒らされたことがあったじゃないか」

「それはそうだけど。この家のセキュリティは行き過ぎじゃない？」

「備えあれば憂いなしだ。そうだろう？」

祖父が真に同意を求める。

「そのとおり。じっちゃんは正しい」

二人だけが知っている真実がある。そして、それを私には知らせてくはない。私はそう確信を深めた。

苛立つ男

計画が失敗しただけでなく、持ち駒一体がまるまる政府の手に落ちた事を知り、その男は苛立っていた。

男が描いていたシナリオはこれでまた大きく狂い始めていた。

「なぜ、こんな事になった？」

どう考えても、こんな仕掛けが普通の家にある訳が無い。いや、ある必要がない。

報道されている事が事実で、そんなものが本当にあつたんだとしたら、奴らはこう言う日が来る事を予期して備えていたと言う事以外あり得ない」

「どうしますか？」

部下らしき男がたずねる。

「そうまでして守りたいものがあの家にはある。そう言う事だ。それなら、我々も考えがある。

力づくではかせるまでだ。

あそこには、娘がいるはずだ。名前を結希と言ったかな。そいつをさらって来い」

「人質ですか？」

「ああ。そうだ」

「分かりました」

「あ、待て」

その指示を実行するため、部屋を出ようとした部下らしい男を呼び止めた。

「はい。何でしょうか？」

「政府側に落ちた一体が生きていたなら、厄介な事になるぞ」

「どう言う事ですか？」

「政府側につく可能性があると言う事だ。場合によっては、ここが政府側に囲まれるかも知れん。備えをしておけ」

「分かりました。ここを撤収できるようにと言う事でよいでしょうか？」

「まあ、そう言う事だ。重要な物は他の場所に移して置いた方がよいだろう。」

場所は私の方で、探しておく」

「分かりました。直ちに」

部下が去った後、男はどこかに電話をかけはじめた。

「私です。困った事になりそうです。」

この場所を引き払わなければならないかも知れませんが、新たな場所をご提供いただきたいのですが」

視線

次の日の朝、私はいつものように学校に向かうバスに乗った。

このバスにはそれほど多くの人は乗っていないが、同じ学校の生徒達は何人か乗っている。

私はバスに乗り込むと、いつもの場所と言ってもいい奥のシートを目指した。その時、バスの中を歩く私にまわりつく視線を感じた。中には隣りの人とひそひそと囁きあう者もいる。

「何？変なの」

私はそう思いながら、いつもの座席に座った。

それからしばらく、私は一人でバスに揺られていた。いつものようにぼんやりと外の景色を眺めながら。そんな間にも、露骨に振り向いて私を見る生徒もいた。

そして、私に向けられたそんな視線の原因を知ったのは由依がバスに乗ってきてからだだった。

「結希。昨日、あんた何も言わなかったけど、とんでもない事になっっていたんだね？」

おはようのあいさつも無しに突然、由依がそう言った。
大変なこと？

私には心当たりは当然あったが、それが知られているとは思っていなかったなので、首を傾げて見せた。

「結希んちをあの化け物が襲い、しかも一体は生け捕りにして撃退したんだって？」

やっぱり、それかとは思ったが、どうしてそれを知っているのかは分からなかった。

「どうして、それを？」

「何言ってるのよ。TV見てないの？」

「TV？」

そう言えば、昨日はそんな余裕無かったな。何かあったの？

もしかして、さっきの話、TVでやっていたの？」

「そうよ。みんな見てるわよ。住所や家まで映ってるんだから、知っている人が見たら、あれが結希んちだって、ばれればよ」

私はそう言えば、工事の職人さんがそんな事を言っていた事を思い出した。でも、まあ、TVで報道されたとしても、そんな事は大事した事無いだろうとしか考えていなかったのだ。

「放送されたのなら、仕方ないわね」

「じゃ、やっぱり本当だったの？」

「うん」

私はその時、バスに乗り合わせた学校の生徒達が、聞き耳を立てている事に気づいた。私がバスに乗った時に感じた視線はこれだったんだ。

「生け捕るのに使った落とし穴もTVで見たけど、あんなのどうして、家の中にあつたの？」

「そうなのよ。それは私も知りたいところなのよ」

「知らなかったの？」

「うん。今回初めて知つたの」

そんな話をしている内に、バスは学校の前に着いた。

私はいつもどおりの気分で、由依と話をしながら、校舎の中に入り、教室を目指した。

教室に近づいた時、中は結構騒がしかったが、私達が入るとぴたりと静かになり、みんなの視線が私に集まった。

私は昨日の事で、興味本位に見られている事に気づいたが、無視して自分の机に向かって歩き始めた。

「なあ、早川。」

そう言いながら、この前、私をからかった遠藤がやって来て、私の進路をふさいだ。

「何？」

私は嫌な予感を感じながら、とりあえず答えた。

「お前んちにやって来た化け物を捕まえたんだろう？」

「うん」

私はこいつの事だ、次に言う事が浮かんできた。それを避けたくて、それだけ言って、横を抜けて行こうとした。

「あれって、早川がやつけたの？」

遠藤は私の進路をふさぎながら、そう言った。私の頭の中にはさつき浮かんでいたこの話の続きが現実味を帯びて来たので、悲しさがこみ上げてきた。

「違う」

そう答えたって、次はどうせあの話だ。私はその言葉も飲み込み、どうしていいのか分からないまま、こみ上げてくる悲しさに涙しうになったその時、私の前に別の男子の背中が映った。

「何？」

そう思った時には、私をからかっていた遠藤は殴られていた。

かばってくれたの？

殴られた遠藤は一瞬後退したが、怒声をあげ、私の前に立った男子を殴り返そうとしている。

「何？どうなっているの？」

私はまだ事態を飲み込めていなかった。

最初に殴った男子は、顔面を殴り返され、私のところまで倒れこんできた。白石だった。口を切っているのか、口から血が出ている。

「私をかばってくれたの？」

私は心の中で、そう思った。さっきまで、私を飲み込みそうなまで、こみ上げてきていた悲しさは突然の事件で、私の心の中で消え去っていた。

私は飛ばされてきた白石を支えた。

「くそっ。俺はお前を許さない」

そう言うと、白石は再び向かって行った。でも、とてもじゃないが、遠藤は白石の敵う相手ではない。私はそう思っていた。それなのに、何故か白石の背中は大きく感じた。

殴りかかった白石は軽くかわされ、再び殴られようとした。しかし、白石を狙ったその拳は白石には届かなかった。真が殴りかかっていた拳を止めたのだ。

「止める。これ以上は俺が許さない」

「何だと。お前には関係ないだろう」

「ある。勝手な喧嘩は許さない。それにそもそも、早川をからかおうとしたお前が悪い」

「いつも、いつも格好つけやがって。お前もやってやる」

今度は真に殴りかかった。普段、真は喧嘩などしないが、付き合いの長い私は真が強い事は知っている。柔道だってやっていたぐらいだ。遠藤の殴りかかって来た腕をひらりとかわすと、真にしては珍しく拳を遠藤の腹部に入れた。

「げほっ」

遠藤はそうめくと、お腹を抱え込んでうずくまった。

「俺はお前のような弱い者をからかう奴は嫌いだ」

真はうずくまる遠藤を見下ろしながら、そう言った。

教室内は騒然としていたが、由依をはじめ、女子の目の色は明らかに真への興味で燃え上がっていた。そりゃ、そうだ。

勉強、スポーツができ、その上喧嘩も強い事を今新たに証明したのだから。

「大丈夫か？」

真が白石に近づいて言った。

「あ、ああ。大丈夫だ。ありがとう」

私も白石のところに行った。

「ありがとう。白石君」

「いや、何にもできなかったね。ごめん」

「ううん。ありがとう。とても、格好よかった」

私は本当にそう思った。真は確かに格好よかったかもしれないが、ある意味強い真には勝負の結果は見えていた。でも、白石は勝てそうにもない相手に立ち向かったのだ。それも、私のために。

「よかったな。早川」

真は私の肩をぽんと叩き、自分の机に向かって行った。真は後ろ姿だったので、見えなかっただろうが、私は小さくうなずいた。そして、私は白石を保健室に連れて行った。

白石は口の中を切っていただけでなく、歯にひびが入っていると事だった。そのため、病院に行く事を勧められた。

「ごめんね。白石君」

変な自信だけある奴だと思っていたが、今は私は白石の事を見直していた。そして、白石のために、何かしたいと思っていた。それだけに、私は授業をさぼってでも、病院に付き添う事を決めた。

惚れた？

白石が保健の先生から行くように言われたのは、この街の中心にある総合市民病院だった。

私がバスに二人並んで乗っている間、白石は私が自分の怪我を気にしている事を忘れさせようとしてか、明るく振る舞い、色々話しかけて来た。この前までは、そんな白石が鬱陶しかったが、今は白石の事を知りたい気になっている。

そして、バスで揺られている間に、私は何だか、白石が愛おしいと感じ始めている事に気付いた。

そんな単純でいいのか？

私は心の底で自問自答してみたが、否定的な答えは浮かんできそうにない。

白石の治療が終わり、清算を済ませた頃はもう昼だった。

私たち二人は再びバスに揺られながら、学校を目指した。

病院に向かった時と同じで、白石は色々な事を語ってくれた。

その話は面白く、私の心の奥にある罪悪感と言うか、白石に対する申し訳ない気持ちは時々忘れさせられていた。

二人を乗せたバスは学校に続く道路に入った。この道をまっすぐ進めば、しばらくして学校に着く。

私は少し寂しい気がして来ていた。

これはやはり恋？

こんな単純に人を好きになっていいのだろうか？

再び私は自分の気持ちが分からず、自問自答し始めた。

「早川さん。もう着くよ」

「あ？うん。今日は本当にありがとう。ごめんなさい」

私は座ったままだったが、もう一度礼を言った。

「いいよ。早川さんに殴られた訳じゃないしね」

私は顔を上げて、白石を見た。腫れた頬が痛々しげで、ついつい私は手で触れてしまっていた。

「早川さん」

私はその声で、現実に戻った。

「あ、ごめんなさい。つい、かわいそうにと」

「あ、もしかして、早川さん俺に惚れた？」

「はあ？」

今までの私なら、そう冷たく言い放つはずだったが、言うべき言葉を見つけれず、それどころか赤面しているのか、顔が熱くなっているのを感じ、黙り込んでしまった。

「ちゃうか」

白石は冗談ぽく話を終わらせたが、まさにその通りのようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6158x/>

Pandora

2011年11月5日09時12分発行